

## 地域と子どもたちがつながり、活発に運動・遊びに親しめる環境づくり！

指導教員 石川工業高等専門学校 建築学科 講師 西本 雅人  
 参加学生 尾田大地・松井亮斗・宮川佳子・宮崎理沙・吉田笑夏・  
 青木 蛍・中江宥斗・東 義貴・吉田大起・キム カエウ オンキア

### 1. 調査研究成果要約

平成 27 年度からの継続的な活動である。昨年度に提案した公園計画を元に公園の整備を行った。整備内容は畑作りやベンチ製作であり、公園片側の「静」のゾーンを対象とした（来年度は「動」のゾーンの整備を予定）。石川高専が整備段取りや企画を担当し、専門業者の助言や指導をもらうなど整備の安全性や施工の向上に努めた。整備の際はワークショップ開催して、児童自ら公園を整備・管理していく意識を持つように配慮した。

### 2. 調査研究の目的

野々市市立御園小学校の前には野代児童公園があるが、学校園がある他には使われていないキウイ畑やベンチなどが置かれており、ほとんど人が利用していない。本事業の目的は遊休化された公園を、現代の子どもたちに不足しがちな多様な運動の機会を与える場として活用するために整備することである。そのためには、小学校の児童や先生方の意見を取り入れ、さらに地域の協力を得て、地域のランドマークとなる公園の環境づくりを提案・実施する。

### 3. 調査研究の内容

4月21日	レンガワークショップ ・公園内にある畑の周りに配置するレンガに小学生が絵を彫るためのワークショップを開催した。
7月7日	整地工事確認 ・芝生ワークショップ前の公園の整地工事（業者に委託）。
7月8日	芝生ワークショップ ・公園の大部分を芝生化するために、芝生のポット苗を小学生たちと一緒に植えるワークショップを開催した。
7月24日	日本建築学会北陸支部研究発表会での成果発表 ・平成27年度の活動を学会にて発表を行った。
8月9日	畑づくりワークショップ ・小学生と一緒に畑を作るためのワークショップを開催した。
11月～12月	ベンチや柵の検討 ・石川高専にてベンチや柵の施工方法や材料選定、業者選定を行った。
1月	ベンチや柵の図面作成 ・業者との数回の打ち合わせにより、施工するための図面を学生が製作した。
2月～3月	ベンチや柵の整備 小学校の春休み期間に学生たちによる公園整備を行う。



図 1. 整備前の公園（平成 27 年 7 月）



図 2. 整備後の公園（平成 28 年 8 月）

#### 4. 調査研究の成果

##### 1) レンガワークショップ

公園に整備する畑の周りに設置するレンガに児童が絵を彫るためのワークショップを開催した。参加者は去年から公園づくりに関わっている6年生100名の児童と石川高専の学生9名である。

まず、前日に小学校の授業でレンガに彫る絵をスケッチした。絵のテーマは御園小学校区にある国指定史跡「御経塚遺跡」であり、御園地域の特徴を表すものとした。児童がイメージしやすいように当時使われていた貝や縄で描いた縄文土器の模様を写真で見せて、当時の生活を思い浮かべて取り組むことができるように配慮した。

ワークショップではレンガ業者2名も参加し、レンガを彫るための技術的な指導を行ってもらった。3クラスがそれぞれ2時限分の授業を使ってレンガ彫りを体験した。



図3. ワークショップの様子の新聞記事  
(2016年4月25日 北國新聞)

図4. ワークショップの様子 (写真上段)

図5. 事前に描いた絵を基にレンガ彫りに  
取り組む子どもたち (写真中段)

図6. 完成したレンガ (写真下段)

##### 2) 整地工事立会い

公園は雑草が生い茂り、また縁石やブロックなどが地中に埋まっている状態であったため、芝生ワークショップに向けて公園の整地を行った。整地工事は地元業者に委託し、先生と一緒に工事の立会いを行った。

##### 3) 芝生ワークショップ

本活動の大きな目的でもある児童が走り回れるための公園をつくるために、公園の全面に芝生を植えるワークショップを行った。整地された公園に、50cm四方のグリッドを描き、予め用意しておいた芝生のポット苗を児童が植えた。また、事前に植える際の注意点や芝生化によってどんな活動ができるかを児童に説明し、公園づくりに対する意識付けを行った。

夏休み前に実施し、芝生の養生の期間は2ヶ月間確保した。養生期間中の芝生の管理は小学校の先生に依頼し、芝刈りと水遣りを徹底してもらった。



図7. 芝生ワークショップの様子

**芝植え理想の公園に**  
野々市市・御園小 隣接の緑地整備

野々市市御園小の6年生約100人は8日、同校に隣接する市野代1号緑地を、自分たちの思いを託して、6年生が交代で水やりなどの世話をした。野代児童公園の呼び名で親しまれている緑地は面積約900平方メートルで、同校がPTAや石川高専、地元住民・企業の協力を得て、児童のアイデアを生かした公園として整備している。2018年度内の完成を目指し、8月に公園内に縄文土器を模した模様を描いたり、たれんを配置する。聞伐、意気込んだ。

公園の名称は「世界で一番近い公園」が候補となっている。環境委員会副委員長の前田祥吾（6年）は「責任を持って芝を育て、近くに住む小さな子どもも安全に遊べる公園にしたい」と意気込んだ。

材を利用した平均台やベンチ、ソーラー式の時計や黒板なども設置する。6年生はアルミ缶を集め、整備費用を補う。

野々市市御園小の6年生約100人は8日、同校に隣接する市野代1号緑地を、自分たちの思いを託して、6年生が交代で水やりなどの世話をした。野代児童公園の呼び名で親しまれている緑地は面積約900平方メートルで、同校がPTAや石川高専、地元住民・企業の協力を得て、児童のアイデアを生かした公園として整備している。2018年度内の完成を目指し、8月に公園内に縄文土器を模した模様を描いたり、たれんを配置する。聞伐、意気込んだ。

自分たちの夢を実現するため、芝を植える児童  
—野々市市の野代1号緑地

図8. ワークショップの新聞記事（2016年7月9日 北國新聞）

4) 日本建築学会北陸支部研究発表会での成果発表

平成27年度の活動の成果報告として日本建築学会北陸支部研究発表会にて発表を行った。主に公園を計画する上での児童とのワークショップの手法についてまとめ、ワークショップを用いる際の課題を報告した。聴講者の反応は自ら資金集めから行っていることに関心が高く、高専生と児童が協同して計画案をまとめたことに一定の評価を得られた。

5) 畑づくりワークショップ

公園の東側に小学校が理科などの授業で用いるための畑を整備した。畑は小学生が全員で囲んで観察できるように円形とし、畑の周りにレンガを設置した。レンガは4月に行ったワークショップで作成したものである。主に以下に示す順序で畑を整備し、技術指導として石黒産業の職人4名に立ち会ってもらった。

- ① 円形の溝の水平レベルを確認し、レンガの高さを決める（石川高専の学生、図9）
- ② 小学生が前のワークショップで描いたレンガを花壇の周りに配置（御園小の児童、図10）
- ③ その配置を基に、レンガにモルタルで固定し、目地とりを行う（石川高専の学生、図11～14）



図9. 水平レベルの確認



図10. レンガの配置



図11. 技術指導を受ける学生



図12. モルタルでレンガを固定



図13. レンガの目地とり



図14. 全体の様子

## 6) ベンチ・柵の図面製作と現地測量

畑周りに配置するためのベンチと、車の往来が多い道路への児童の飛び出しを防ぐための柵のデザイン、配置の検討、図面製作を行った。図面製作にあたっては技術相談として北陸リビング社に依頼した。

図面製作にあたっては学生の実習の場として活用した。初めに描いた図面は施工の順序や方法、材料選定まで検討できておらず、北陸リビング社の担当者にもどのようにして材を接合して、地面に固定するかなど具体的な助言を頂いた（図 15）。設置する場所の測量を行い（図 16）、高低差や水処理の確認を行い、アンカーボルトの大きさ、根入れの深さや丸太材の径を学生自身が調べ図面に起こしていく作業を行ってきた（図 17）。この検討を重ね、図面の修正を重ねることが建築の実務には必要であり、その一端を学生たちが体験できたと思われる。今年度の残りの作業を下記に示す。

- ① 野々市市とのベンチ・柵の設置に関する打合せ
- ② ベンチ・柵の製作費用の金額調整（不足分は小学校で確保した助成金を利用）
- ③ ベンチ・柵の整備（2月下旬～3月上旬を予定）



図 15. 北陸リビング社と打合せ



図 16. 公園での現地測量

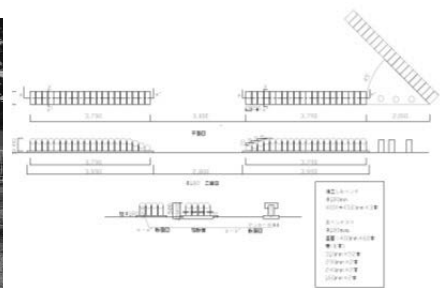


図 17. 学生が描いた施工図面

## 5. 来年度の調査研究計画

来年度はこの事業の最終年にあたる年度である。昨年度は公園の計画案を作成し「静」と「動」のゾーンに分かれた公園づくりを提案した。本年度は「静」のゾーンの整備を行い、ベンチや柵、看板などを設置した。来年度は「動」のゾーンの整備を行う予定である。また、小学校の教師や児童で維持管理できる仕組みづくりを行う。さらに、石川高専の学生らが定期的に利用状況の調査を実施しフィードバックを行う等、今後も小学校と地域と連携して公園の維持管理を行う。

## 6. 調査研究に対する地域からの評価

小学校の先生から、「子どもたちが公園を元気に走り回るようになった」と意見を頂いた。先日の大雪の日でも子どもたちが元気に外で遊んでいたと写真を送っていただいた（図 18）。以前は、放置されていたキウイ畑や、畑が西側の大きな広場の中央にあることで動的な遊びが行えない状態であった。芝生の広場が確保されたことで短時間でも遊びに行けることができ、公園づくりの大きな目的は達成されたと思われる。



図 18. 雪の中で公園で遊ぶ児童

また、子どもたちが公園づくりに関わっている意識を向上させることができたことである。現在の6年生が去年から定期的に公園づくりに関わっていることで公園が整備されている様子を目の当たりにしており、「自分たちが作ったもの」として自覚を持つようになっており、ゼミナールの学生が公園で作業していると必ず児童が寄ってきて「こんな風にして使いたい、こんなものを作りたい」との意見を伝えていた（図 19）。課題は、持続的な公園づくりのために6年生が下級生にどのように公園づくりやその遊び方を伝えていくことである。



図 19. 測量中の学生に話しかける児童